高梨氏館跡

発掘調査報告書

東小口調査

1995－3

中野市教育委員会

高梨氏館跡

発掘調査報告書

東小口調査

1995－3

中野市教育委員会

刊行にあたって

高梨氏館跡は全国的にみても、極めて保存状態の良い館跡として知られております。中野市ではこの高梨氏館跡を大切な文化財として保存するとともに「高梨氏館跡公園」として利用して頂くために、整備を進めております。

今回の調査は公園の整備に先立ち、遺跡の様子を明らかにし、保存していくための資料を得るために実施しました。

本報告書が高梨氏館跡保存の一助となり、郷土の歴史について、より一層の理解や関心を深めて頂く機会になれば幸いです。

なお、本書の作成にあたっては湯本軍一先生をはじめ関係各位から、多くのご指導を賜りました。あつく御礼を申し上げて刊行のあいさつとします。

平成7年3月

中野市教育委員会

教育長　小林　治己

緒　言

1. 本報告書は中野市小館に所在する高梨氏館跡、東側小口の調査報告書である。
2. 調査は「高梨館跡公園」として整備することにともなうものである。
3. 調査は中野市教育委員会が実施した。
4. 本調査報告書は湯本軍一が監修し、櫃原長則が執筆した。
5. 調査報告は概報も含めてすでに4回なされている。

高梨氏館跡発掘調査報告書

本文目次

刊行にあたって

緒言

第Ⅰ章　これまでの調査の概要と成果……1

第1節　堀と土塁……1

1　北面中央の土塁……1

2　東面北の土塁……1

第2節　小口……1

1　西面の北小口……1

2　西面土塁南小口……4

3　南面の東小口……4

4　築地塀跡……4

第3節　建物址と庭園……5

1　建物址……5

2　庭　園……7

第Ⅱ章　今回の調査の結果……9

第1節　遺構……9

1　東面土塁内側の石積……9

2　東小口の再調査……9

(1)　Ⅳ期の東小口……9

(2)　Ⅲ期の東小口……9

(3)　Ⅱ期の東小口……10

(4)　Ⅰ期の東小口……11

(5)　かわらけ廃棄坑……12

第2節　遺物……16

1　東面土塁石積検出の陶磁器と土器……16

2　東小口内出土遺物……16

3　中世土師皿について……19

第3節　各小口の比較検討……24

1　東面の小口……24

2　西側南の小口……25

3　西側北の小口……25

第Ⅲ章　まとめ……27

挿図目次

第1図　高梨氏館跡の位置……2
第2図　館跡主要部の遺構配置図……3
第3図　西側土塁の小口……4
第4図　東側土塁石積実測図……8
第5図　Ⅳ期の東小口……10
第6図　Ⅲ期の東小口……11
第7図　Ⅱ期の東小口……12
第8図　Ⅰ期の東小口……13
第9図　東小口断面図……13
第10図　東小口付近の土塁・堀断面図……14
第11図　中世土師皿検出図……15
第12図　陶磁器・土器拓影図……17
第13図　陶磁器実測図……20
第14図　古銭拓影図……20
第15図　中世土師皿実測図(1)……22
第16図　中世土師皿実測図(2)……23

写真目次

写真1　西から見た東小口……29
2　東面土塁の石積（右は東小口）……29
3　同　中央から北方を見る……29
4　同　北の部分……29
5　内部から見た東小口
（中央から奥第Ⅳ期の遺構）……30
6　小口南側のⅢ期の石積（手前と上）30
7　東小口の第Ⅱ期（手前）と第Ⅳ期の
遺構（箱尺右礎石痕の石）……30
8　礎石痕の石（裏返しになっていた）31
9　外側から見た第Ⅲ期の東小口……31
10　東小口第Ⅱ期の礎石現れる……31
11　北から見た東小口の第Ⅱ期の遺構面32
12　北から見た第Ⅱ期の側壁石積と
第Ⅰ期遺構面の掘り下げ……32
13　南から見た東小口第Ⅰ期遺構面と
北側壁石積……32
14　西から見た東小口南袖石積前の
中世土師皿……33
15　同　第2面……33
16　同　南袖石積全景……33
17　西から見た中世土師皿（かわらけ）
廃棄坑……34
18　かわらけ廃棄坑の上部……34
19　南上から見たかわらけ廃棄坑……34
20　かわらけ廃棄坑の中層……35
21　同　下層……35
22　かわらけ廃棄坑の掘り方……35
23　西から見た東小口第Ⅰ期遺構面……36
24　同　調査完了時……36
25　同　東から見る……36

第Ⅰ章　今までの調査の概要と成果

第1節　堀と土塁

館跡は現状では方形単郭で、「館まわり」の家臣などの屋敷跡や、防御施設は確認されていない。館の堀まで含めた規模は東西約130m、南北約100mで、土塁は四周に残っている。しかし、後世に改変をうけたところがあり、近世～現代に積まれた石積もある。

土塁は内部から1～3mの高さで残り、残存のよい所の土塁基底幅は10mである。堀幅は6～8.5mである。堀底から残存土塁の頂部までの垂直塁壁高は、7.4m（実効塁壁高11m）に達する所もある。土塁の断ち割り調査では、中心に築地塀をつつみ込んだ土塁が南面（側）にあった（1989年調査）。築地塀の時期、これに両面から盛土した時期、全面に堀の土砂を掻き上げて、堀と土塁の防備を強化した時期（現状の姿）の、3段階の画期を認めることができる。

1　北面中央の土塁（1990年調査）

内側中段に石積があり、土塁の半分の高さまでは、版築による砂質土と暗褐色上の互層とからなっている。上部は掻き上げで高さを増す、2時期の改築が予想される。北面東よりの土塁の調査（1990年）では、基層に直角方向の砂利を含まない砂壌土による土盛があった。ここに石積や炭・灰層があり、中段に石積を伴う、掻き上げ土砂による土塁が構築されている。ここでも2時期の重複が確認される。

2　東面北の土塁（1990年調査）

掻き上げ土砂の下に砂礫の締まった土層が約80㎝、砂利層が20㎝、砂壌土の締まった層が約1mある。その下層には径30～40㎝の川原石の面を内側に揃えた石列の下部遺構がある。これは内面の発掘遺構面と同一であった。

四周する堀の断面は、U字形またはV字形で、石積などは施さず、素掘で、空堀とみられている。しかし西面北の小口土橋と、東面小口の土橋は同じレベルであり、東小口東の道の北側には東へ流れる溝を伴っており、夜間瀬川の氾濫に備えたものかとも見られる。

第2節　小　口

館の出入り口の小口（虎口）は、今までの調査結果では、すべて（平入り）の形式をとっている。今回再調査した東面の小口を除いて報告する。

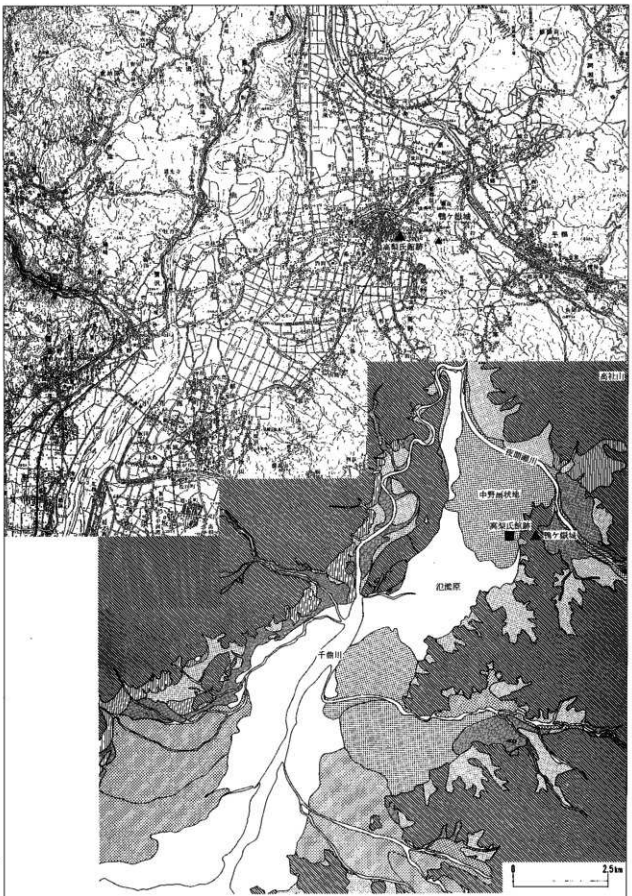
1　西面の北小口（第3図）

ここは土橋を伴っている。土橋南は、上に近・現代の石積があり、下に中世の石積が残り、根石面からテラスをつくり、さらに堀は深くなっている。調査時点（1989・90年）の土塁頂部（垂直塁壁）までの高さは、6.3mの落差がある。堀幅は9m、この東の土塁の敷は約9.5mである。土橋の幅は小口の幅とほぼ同じ3m弱で、北側は積み石大の石が崩落していた。黄色粘土がみられたが、石積の存在は明確にできなかった。

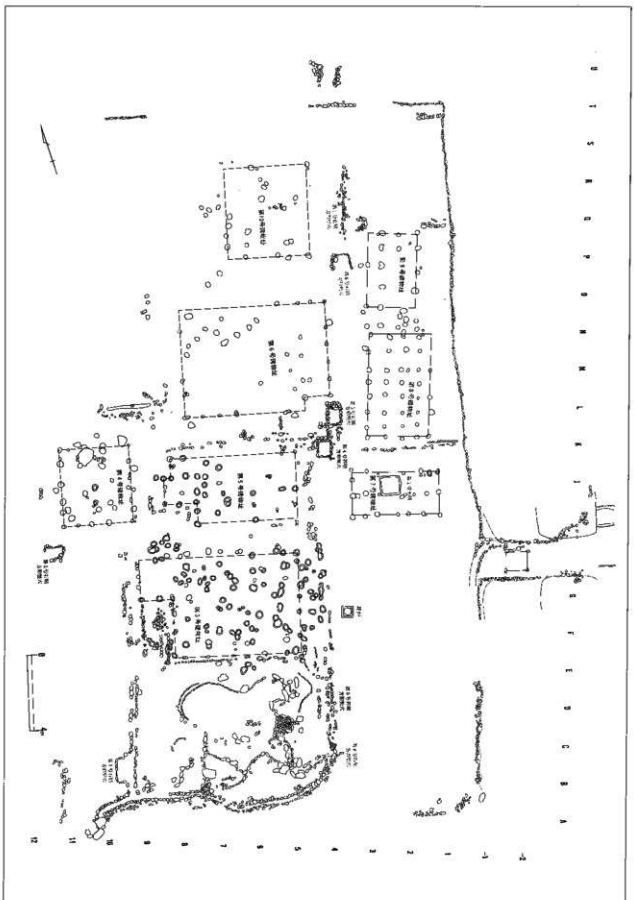
小口の北側は、前面に後世の石積が積まれ、現行の通路が狭くなっていた。この石積を取り除いて、中世の石積を発掘調査した。小口南側は崩落土を取り除いた段階で、中世の石積が現れた。この石積は高さ約1m、長さ8.3m残存し、内部は直角で西面（側）土塁内側の石積に連続している。しかしこの石積の門の礎石の所から外部にかけて、約30m狭めて二重に石積がある。これは隙間から侵入を防ぐ目的とみられる。

北側の石積は高さ約1m、外部から長さ7.8㎝の所まで直線で、ここから外側へ20度折れてから5.8mの距離で直角に曲がり、土塁中段の石積に接続している。

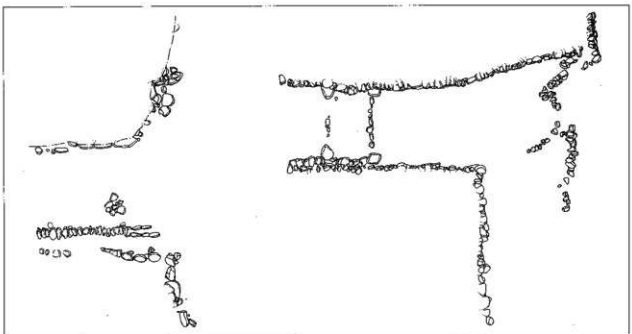
小口の両側壁石積間（幅）は、3.1m前後あり、内部は前記したように広くなっている。この小口の外よりの所に門の礎石が4基ある。外側の礎石2基は面径50×80㎝と大きく、内側の礎石2基は35×45㎝ほどで小さい。内側の礎石間には面を内側に揃えた台列があった。外側の礎石間の中央には「鼠放し」（門出入り口の扉の下にあって溝の無い敷居、上は蟻《まぐさ》）の石があった。この層位は表層の敷き砂利面と堆積1:30㎝、下に1層の遺構面があり、礎石面に壁土（大壁）・炭片・鎹（かすがい）などが見られた。この門の規模は、門の扉をささえる柱の径が推定30㎝、柱の



第1図　高梨氏館跡の位置



第２図　館跡主要部の遺構配置図



第３図　西側土塁の小口

間の距離は2.7ｍ、奥行き２ｍである。

２　西面土塁南小口（第３図）（1989年調査）

この小口の西側には、堀の中に不動堂があって、現在個人所有になっているため、小口の奥行きを館内部から６ｍ調査しただけである。したがって堀側の遺構は不明である。しかし現況からみるだけでは土橋の有無は明らかでない。調査前ここは土塁が低くなっていて、復原整備を始めると山石の土塁石積が露出したので、緊急に調査した（1989年）。小口側壁石積の残りは根石のみで、長径１ｍを超す石もあった。館内側の土塁側壁には山石が使われており、構築当初はかなり重視された小口だったようである。

北へ２ｍの土塁に、小口と平行して、暗渠（幅75㎝、高さ60㎝）排水の施設がある。南内側石積の角は直角であるが、丸く開いている礎石の残りは悪い。

小口の幅は約4.2㎝を測り、側壁南石積の面から中心へ１ｍの位置に河原石を並べた、幅10～15㎝、長さ5.2ｍの蓋石のある排水溝があった。

この小口の大部分は、後によそから運ばれてきた石で埋まり、安定した黒色を呈する上層は遺構面上から10㎝位であった。遺構面には鉄釘と、木材の炭化したものが多数散乱していた。しかし礎石などは検出されず、調査期間が限られていた関係もあって、礎石の抜き穴、柱穴などは検出できなかった。ここは埋め戻し保存してある。

３　南面の東小口（1990年調査）

庭園の南東に位置する小口で、発掘前からここの土塁部分に３ｍの矩折部があり、庭園が南に約３ｍ広がっていた。ここの上塁は内側からの高さは低くなっていた。これは防備には弱点となるが、庭園の修景のためとの見方がある。この矩折部には、庭石の破片、五輪塔の地輪３、火輪１、不明加工石などが、大小の河原石に混じって検出されたが、後に人為的に埋められたものとみられる。

ここは西から続く土塁の上留石積が長さ6.5ｍ、高さ0.6ｍが残っていた。東側には縦横50㎝の水路の石積があり、土塁の部分には長さ1.5ｍにも及ぶ平盤石が２枚架設されていた。この東側の遺構の残りは悪く、残っていた石などから推定して、約３ｍの小口幅を想定している。

この南の堀側に石積が長さ11ｍにわたって積まれ、その堀の中にかわらけが集中して検出された。中には重なったものもあったが油煙のついたものは無かった。さらに橋の存在について調査したが、確認には至らなかった。

４　築地塀跡（1989年調査）

現在通用口になっている南入口にあり、当初は正面（大門）との予想のもとに発掘した。しかし、

結果的にそうではないことが判明した。この入口の土塁両袖に、新しい石積があり、これを取り去って調査した。この時の観察によれば、上橋部分は層序をなさず、後世に埋められて土橋状になったものと推定される。土橋の左右を掘り下げた発掘の所見では、西側の石積には、根石に火熱を受けた径1m近い石が積まれ、黒土堆積層の上に据えられていた。東側の石積はさらに新しい手法で積まれ、近世以降に開削・構築されたことが推定される。これには稲荷社の祭祀の関係がからんでいると推測される。

南入口両側の新しい石積を取り除き掘り下げると、中央部分のわずかなところを除いて白色土の散在が認められた。左右の土塁がほぼ旧状をとどめている位置まで掘り進むと、築地塀の跡が土塁の中心に現れた。幅1.2m、高さ2.2mを測り、頂部は崩れて丸くなり、内側に漆喰（白土）が塗られていた。この築地塀に内部の全容不明の地下遺構、小さい池庭と思われる遺構から続いて配石が連なっていた。

この築地塀下層の鉄分の含まれた堆積土の中に、炭・かわらけ破片・景徳元寶（1050年初鋳）・熙寧元寶（同1057）の火熱を受けたものが検出された。

この築地塀は石列や柱穴を伴って存在し、石列・柱穴は築造時の遺構と推定されるが、なほ検証が必要である。

築地塀は、山土の粘土を主原料にして版築され、次年度の調査で、長さが20m前後と確認された。

第3節　建物址と庭園

1　建物址　（第2図）

試堀の時から館内の畑の地中に、建物址の礎石が残っていることが確認されていた。後に調査した第4号建物址のように、表土（耕作土）のすぐ下に検出された所もあるが、表土を除去した段階では、遺構が読み取ることができなかった。館内の西半分には、南北方向に幅30cm前後の小石列と、土のみの所（畝間）が90cmほどあった。これは桑畑の痕跡である。とくに内面南小口の内側は、良好な土のみの堆積が広がっていた。また館内の東半分は、東西方向の畝間となっていた。これは明治中期から昭和前期にかけて盛んだった、桑栽培の跡である。小石列の位置は、桑の植えられた所と推定される。桑の株跡が柱穴状に残る場合は、柱穴と混同しやすく注意を要する。

高梨家の新築工事（後に市に移管）に伴う発掘調査（1988年）では、館内西側の空閑部の中央から柱穴が発見されている。これは黒土層の堆積した層位にあり、表面下70cmから検出されたもので、戦国時代以前の掘立建物址と想定している。

発掘復元された礎石建物の大部分が存在した時期には、館内西方は空閑地帯であったと推定される。礎石建物址は、西側土塁内側から38m入った南北方向から存在する。また中央北の旧高梨家の存在した所（未調査区）は、第2号建物址の一部や第4号建物址の北の礎石、復元工事中に発見された礎石などにより、礎石建物址の存在は確実視されている。

第1号建物址（1992年最終調査結果、第2号以下も同じ）は、現南通行口の内側に存在し、西方は日常の通行路のため調査できず、不明の部分がある。

礎石は最上層の遺構にある。南土塁際に東西にみられる礎石間（柱間）は、2.25m（7.5尺）と、2.25mの2間と、これに対応する南北の礎石間は5.25m（3間）である。これとは別にこの建物址と重なって残る北の礎石間は、南北は1.95mと2.6mと1.95mを計測し、東西の礎石間3.8mと1.95m

の距離に礎石の掘り方（礎石穴）があり、2時期の礎石建物の重複をみる。しかし規模は不明である。

第2号建物址は、第1号建物址の北方約30mに位置し、礎石と礎石の掘り方、南落ち溝、焼け土などが検出されている。雨落ち溝は砂が埋まった状態で、表面が焼けており、戦乱の慌ただしさを裏付けるものかも知れない。建物址の南北方向にある礎石の掘り方の間が2.7m（9尺）と、礎石の間が3.7m（10.25尺）ある。東西方向の礎石と2.25m（7.5尺）離れた礎石掘り方があり、東方に拡がる建物址とみられるが、具体的な規模は不明である。

第3号建物址は庭園の北にある。西北面に間口約5.25m×奥行3.6mの中門（人口）があり、母屋は、桁行13.8m（5間）×梁行11.85m（4間）の建物と推定される。建物の南の庭園の池に面して緑束の礎石があり、前に犬走りの縁石が連なっている。

中門の南に小築地塀の跡があり、6mにわたって塀の基礎の中心部に小石列石を残している。この内側の空間には、南北方向の溝が残っている。

この建物は庭園に面していることから、接待・饗宴の「ハレ」の間として使われる、会所または主殿と呼ばれる建物と思われる。

第4号建物址は、南北7.5m（4間）×東西8.35m（4間）のほぼ方形の建物で、蔵または堂の平面に似た建物である。この建物の西南にみられる1.8m×1.2m×0.5mの第2号方形石積竪穴は、内部の黒色土（有機物分解）の存在からして、便所の可能性が高い。

第5号建物址は、第3号建物址と第6号建物址の間にあって、周囲は排水溝で囲まれている。西側に入り角のある建物で、西方には礎石と、礎石の掘り方が発見された。しかし東側は検出が少なかった。この礎石建物址については、周囲の溝の遺構により、建物の規模を推定した。規模は東西14.45m×南北7.25mの建物と推定される。

第6号建物址と推定したのは、第5号建物址の北に溝をへだてた所で、東南角に水溜め、または貯蔵用とみられる、第4・第5号石積方形竪穴が二つ存在する。

この礎石建物址は表土除去後の削平作業時に、東部分に黄褐色土の分布が、深い所で厚さ20cm認められたが、この土がどこから、自然または人為的に堆積したのか、疑問に思われた。これは壁土の量のみとは考え難い。

建物の規模は南北11.5m×東西16mの礎石建物址と推定される。貯蔵穴、水洗い場が付属していることから奥向きの清所（台所）の機能を持った建物と推定される。

第7号建物址は東小口内の北側に位置し、第5号建物の東にあたる。規模は東西4.8m（2間）×南北9.5m（5間）の建物で、柱穴または一部の礎石の残存により、掘立建物と礎石建物が時期を異にして存在した可能性がある。

中央北には1辺1.8m、深さ0.8mの焼けた第1号土坑がある。人壁の部分、吊錠座・中国銭などの銅製品、染付・鉄釉などの陶磁器、鉄釘類、鹿角など多種の遺物が埋められていた。

館内の礎石建物址からは、いずれも焼け土（壁土）が検出された。しかしここでは表土を除いた段階から焼け土がとくに密に認められ、東小口内部にまで広がっていた。このような土坑は鋳物関係の遺構にみられると、宮本長二郎氏から教示を受けた。

第8号建物址は、第7号建物址の北に溝をへだて存在する。規模は東西6.7m（4間）×南北7.3m（5間）。礎石建物でなく、堀立柱の建物の可能性がつよい。この建物址から、米・麦・豆などの炭化物が散乱して検出されているので、この二つの建物址は、穀物の貯蔵所・倉庫と思われる。

第9号建物址は第8号建物址の北に隣接し、南北13.1m×東西5.4mの規模の建物で、第8号建物址とは、ほとんど妻桁が接していたものと想定される。北側に溝、西側に第6・第7号石積方形竪穴があり、北の土塁内角部に10㎡ほどの空間がある。建物の用途は先述のとおりである。

これらの建物は、土塁が築造された後、作られたもので、土塁と建物の方向は一致しない。

第10号建物址は、礎石や礎石掘り方の検出が少なく、確実な規模は不明である。この建物については東よりに、南北方向の表面の焼けた礎石３個と、礎石掘り方１基が残っていた。この間隔は1.95ｍ（6.5尺）と1.8ｍ（６尺）と1.65ｍ（5.5尺）と不統一である。この建物址の規模を強いて推定すれば、東西8.6ｍ（４間）×南北10.05ｍ（５間）とみられる。

この建物址の西方には、初めに述べたように、礎石建物址の存在が推定されている。

以上の第４号から第10号の建物址のうち、第７号建物址を除けば、館の日常生活を支える建物群と推定される。

しかし先述のように、礎石建物址の存在が知られる、館内中央北の発掘が完了していないため、全体像の建物群の把握は、困難である。

これらの礎石建物址が主に廃絶時の姿を残しているとしたら、これらの建物群は、ほぼ16世紀におさまると考えられる。

しかし礎石建物址には想定復元提示（平面表示）したほかに、異方向をとる礎石や、礎石掘り方などが存在することから、さらに建物址個々の構造や、建て替え、存続期間の問題が、将来に残されている。

2　庭　園　（第２図）

庭園は館内の東南部に位置し、発掘前には庭石の一部が露出していた。庭石の北はやや凹地になっており、池の存在が予想されていた。ここには高梨政道歌碑の敷地が６㎡ほど占め、全容が判明したのは、1992年の調査であった。

庭園は第３号建物址の南にあり、西は建物址群からくる排水路に画され、東は導水路に画されている。しかし東の土塁間まで約15ｍの未調査部分がある。南側土塁裾には、東側の導水路から接続する排水路が曲線を描いている。この上塁は高さが１ｍ余と低く、先述のごとく南に張り出しており、庭園の修景上はともかく、防御上では問題がある。

調査の結果、この庭園には、大きく二つの画期があることが判明した。Ⅰ期は池泉庭園である。東南の滝石組の東には、長径50㎝の河原石などで造られた導水路があり、東側の水溜めに接続していた。これは東小口最下層の水路、またはその北方の水路（？）から導水されたとみられる。この時期に該当する石組の一部は、滝石組の付近（一部後世に除去）とみられる。

滝口付近から北に続く、直線に並ぶ長径30㎝前後の河原石の延長2.5ｍと、その東へ奥行き1.7ｍの洲浜状の敷石などは、後に修築された可能性があり、奥に本来の汀線の石が遠なっていた。また北側汀線の石列の外（北）側には、土の撹乱跡が幅約２ｍにわたって確認され、池そのものの移動、汀線の改築などが想定される。

北から西側部分は要所に、山石の景石を配し、長径50㎝前後の偏平の河原石を立て並べて、汀線を形成している。

池中央南には中島とみられる３石があり、池の底からは、漏水防御の工作物や敷石・粘土などは検出されなかった。このように、扇状地の埋立造成地にある池の立地からみれば、かなりの水量を確保しなければ池泉の維持は困難とみられる。

池の排水路は、精査したところ検出されなかった。これは、木管がくされたか、あるいは水路が破壊されたとみられる。

このように２期目の池は枯池となり、汀線には河原石が復列に並べられていた。

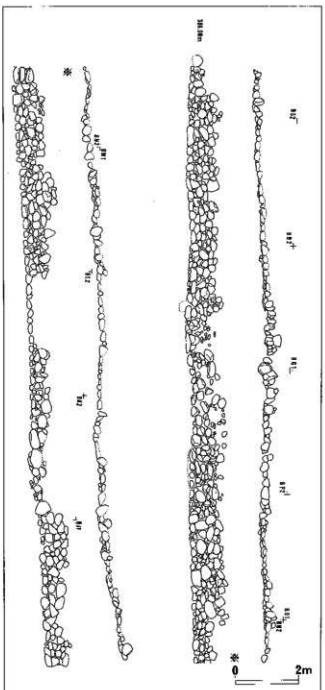
第３号建物址の東南や池の西北には、長径30㎝前後の河原石を縁石（見切り石）とした、回遊路がある。

池の南中央には、高さ約２ｍ、幅1.7ｍの「立石」があり、その発掘調査では、据え石の掘り方を探り、そこに適合する石を最小限度復元している。さらに汀線のくずれた配列の石は据えなおし、欠落した部分は、刻印を付して補充し、第Ⅱ期の庭園を復元し展示している。

また現南面通行口の土塁の中心から、築地塀の跡が検出された。これに続く北側に庭園風の配石がみられた。第１号建物址北方の地下１ｍからは、湿地と庭石とみられるものが検出されている。これらは先に記した庭園より一段階古く、築地を含めて高梨氏入館以前の遺構の可能性が高い。

このような地下遺構の存在や土塁の方向、断面の構造などから、先住者の屋敷（館）の存在が予想される。しかし具体的には、遺跡調査の制約上全面発掘は考えられず、先住者の屋敷の規模・構造を知ることは不可能である。

今まで見てきたように、高梨氏が16世紀はじめに、この地を拡張整備して、館を築いたとすれば、先住者の確定を含めて、これらの問題解決には、さらに文献史学、考古学などの協力による、学際的研究が必要である。



第４図　東側土塁石積実測図

第Ⅱ章　今回の調査の成果

第1節　遺　構

1　東面（側）土塁内側の石積（第4図）

東面土塁内側の石積は天端石が露出していた部分があり、1990年の調査時から、その存在は知られていた。とくに第9号建物址の東では、土塁内部まで断ち割って調査し、根石まで掘り下げた。この部分には石臼の下石を積み石に転用したものもあり、手法は布積み崩しに類する積み方である。石積は前傾姿勢をとるものが多く、発掘によって倒壊する恐れがあった。したがって、その南方の石積は、復元整備の方針が決定するまで、発掘調査は保留された。

石積には裏込め石はないが、かわりに手近の土砂（ほかの石積には一部粘土を使用した所がある）を練って、積み石面を調整し、積み上げたものとみられる。積み石は最大径面50cm、高さは良好な残存部分で1.05ｍで、調査延長は前年調査分を合わせて約40ｍである。

石積の崩落の結果、積み石が集中した（ＢＮ２グリット）ところや、根石だけ（ＢＮ２グリット）のところもあった。また東小口北（ＢＩ１）の約４ｍの石積は、崩落した石が積石状になっていたが、石積の前面に存在したので取り除いた。

この石積の復元には、主に崩落した積石の中から選んで使用した。目地には粘土を使用して固めた。

2　東小口の再調査

この小口は1990年上層に遺構のみられない西半分（ＡＨ１・－ＡＨ１）で発掘調査を行った。この時は上部は、館内部でリンゴ栽培した時に小口を塞いだ石積と、大量のガラス・瀬戸物などの廃棄物で埋まっていた。これらを取り除いて、館の内部から、上部遺構の見られなかった小口の中心まで、焼け土層の広がりを求めて調査した。

この東小口に通ずる第７号建物址の南側（ＡＨ２）では、1987年の発掘調査で、焼け土層の下からかわらけ（中世土師器）が多く検出されている。この焼け土層には中国製の陶磁器・古銭や金属製品、ガラス玉・鹿角など多種にわたって検出されている（『高梨氏館跡発掘調査報』Ⅱ　1991）。

1990年の調査で小口北側の石積は、ほぼ原位置を保っていたものの、積み直された形跡があった。小口の中央上に山石の存在が分かったが、それに続く石積の検出ができずに終わった。この時点では、小口南側は崩れかかった石積が堆積土層上から積まれていることが分かったが、その奥の石積の存在は判明しなかった。

この時は、小口の中央から東に存在した、溝状遺構（外側へ傾斜）と土橋中央に存在した南北方向の石積が検出された。内部の調査では、先に記した遺物のほかに、遺構として、内部入口部の南北方向の２列の石（溝か）が、焼け土層の上に据えられ、焼け土混じりの層の下からは、面（つら）を北に向けた弧状の石列が検出されている。

このように1990年と今回の２度の発掘調査で判明した東小口の遺構をⅠ～Ⅲ期に分ける。さらに、その下部遺構のかわらけ廃棄坑と溝状列石をⅠ期とし、合わせてⅣ期（４段階）に分けて説明する。

(1)　Ⅳ期の東小口（第８図）　上部の廃棄物などを取り除いた最初の遺構である。下部遺構が埋められて（または埋まって）、小口の幅が狭くなった時期のものである。小口の西の焼け土層上に南北方向の溝があり、小口内部には、中央北よりに小形の河原石を並べた溝状遺構が、外に傾斜して東西方向にあった。しかしこの溝状の石はⅢ期の小口南側壁の石積の根石のレベルより上層にあり、除去されるべきものであった。したがって調査者は、中世の遺構かどうか疑問に思っている。なお、この面では門の礎石、柱の掘り方などは検出されていない。

この Ⅳ期には、土橋中央の南北石積はすでに埋もれていたとみられる。

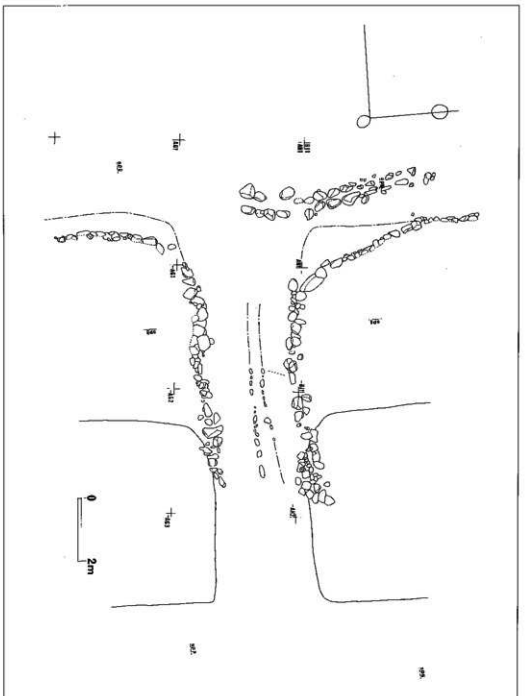
(2)　Ⅲ期の東小口（第６図）　この時期の小口側壁石積間（小口幅）は2.5ｍ前後あり、それに連絡する内部の両袖石積が「八字状」に開いて

いる。この石積の根石の底辺部分は、土塁内部の南袖石積は土中に隠れ、同様な北側下段石積の天端石がわずか露出する程度である。

この南側壁の土塁中央の上留め石積の高さは1.15ｍ、底辺（敷）の長さは3.6ｍが直線で、2.7ｍが斜線で、それに続いて土塁内部の上段の直線の石積に連なる。この石積は高さ50㎝内外である。北側の斜線部分の長さは約4.8ｍ、高さ60㎝前後である。

この時期の小口は、黒土（炭層）の点検からすると、土橋中央に南北３ｍ、高さ0.6ｍの石積を施し、小口内部に対しては先の「八の字」形の石積を構築する時期である。石積の根石は内部が下がっており、小口内部が段状に凹んでいた可能性がある。これらの構築の背景には、防御態勢の強化が考えられる。

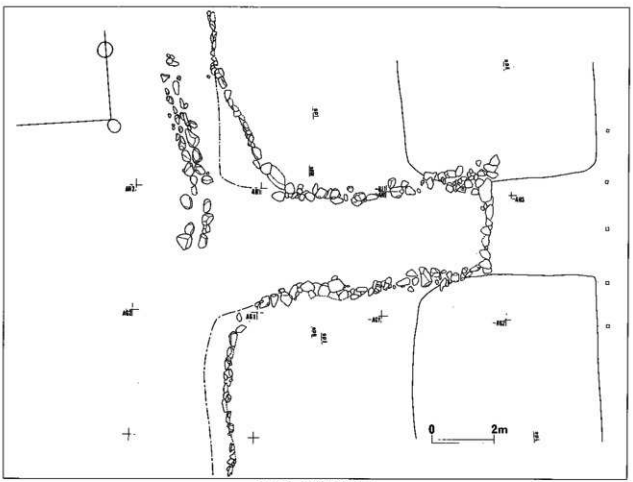
(3) Ⅱ期の東小口（第７図） 小口の幅がⅢ期の南側側壁内石積より約80㎝広く、約3.5ｍの小口幅で、門の礎石が４基存在する時期である。



第５図 Ⅳ期の東小口

この検出面は先のⅢ期の検出面より40㎝低い。この層は堀の砂利層の構成と似ている。Ⅲ期の南側壁石積を取り除くと、稜線の最下層の石（１ｍ×0.8ｍ×0.6ｍ）の裏に火熱によってできた、方形柱の痕跡があり、一辺15.5㎝を計測した（図７）。

Ⅱ期の南側壁石積は、基底幅5.5ｍ（土塁基底幅6.7ｍ）、高さ1.6ｍを測る。西（内）部の上の積石は、第Ⅲ期の石積によって改変をうけていた。



第6図　III期の東小口

この南土壁土留め石積の延長線上に土壁南の石積があり、同時期に構築された可能性がある。この堀に面する石積は、Ⅱ期より後に根石の前方に約1ｍ掘り下げており、Ⅲ期に普請され小口に盛られた可能性がある。

このⅡ期の検出面には、炭を交えた黒色土層が約5㎝の厚さで広がり、南側壁石積の根石には、火熱によって剥げている石があった。しかし土橋中央石積ぎわで、黒色土層は断絶しており、この時期の小口はここに石積は無く、平坦に館外の道に通じていたとみられる。

このⅡ期は、南の側壁石積から連続する土壁内部の下段石積は直角で、角の石積が2～3個失われていた。下段（内面）の石積の高さ約60㎝、天端の平面は、上段石積まで60㎝を測る。北の側壁石積の角は、積み石が一部失われているが、直角で、上壁内部の石積の高さは60㎝である。

門の礎石は、小口のやや外面にあり、30～40㎝の平面を有する石で構成されている。内側の礎石A（北）と礎石B（南）間は1.95㎝、外側礎石C（北）と礎石D（南）間も同距離で、礎石AとC間は2.25ｍを測る。レベルは礎石Aが384.91ｍ、礎石Bが384.85ｍ、礎石Cが385.03ｍ、礎石Dが385.01ｍであったが、C・Dの礎石は平盤石を上に2個重ねている。1石を取り去ったレベルは、礎石Cが384.89ｍ、礎石Dが384.88ｍ、2石を取り去ったレベルは礎石Cが384.77ｍ、礎石Dが384.72ｍとなり、C・Dは中間の礎石面を採用すると、4基のレベル面は最大差5.3㎝となる。

このように外側の礎石に限り、少なくとも2時期の存在が考えられ、門柱の根元の腐食によって礎石を補ったとも見られる。

(4)　Ⅰ期の東小口（第8図）　2期の黒色土層の下層に、さらに遺構が存在した。溝状遺構1は、小口縦方向に対して直線斜状をなし、内部に延長4ｍが残存し、面を内面に向けた列石である。

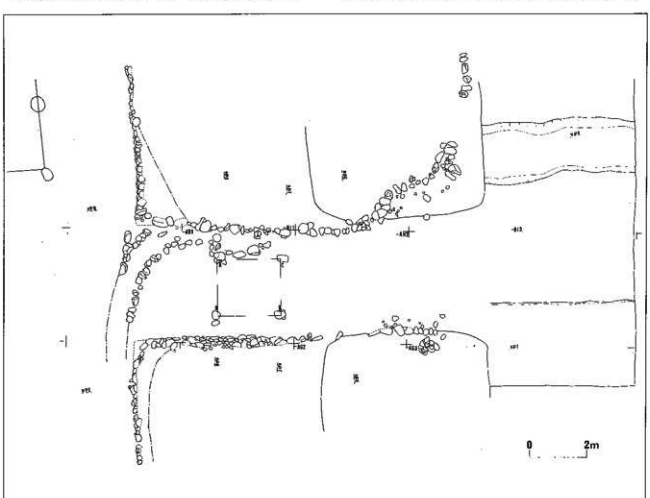
最高のレベルは384.73mで、片側は失われている。この列石の南には、20～30cm幅に川砂が帯状に分布し、東は、この川砂が分布するのみで列石は無く、延長8.5mに及んでいた。この中からかわらけ・炭片などが点々と検出された。礎石Cはこの川砂の上に据えられていた。この溝状遺構は、内部にわずかに傾斜し、土橋の外から引水できるレベルに位置することを確認した。

溝状遺構2は、溝状遺構1から面を内面に向けて、斜状に3mほど確認される列石で、最高レベルは380.84m、そこから館内部にかけて、溝列石になり得る石が多数存在した。しかし確かな配列を示していなかった。

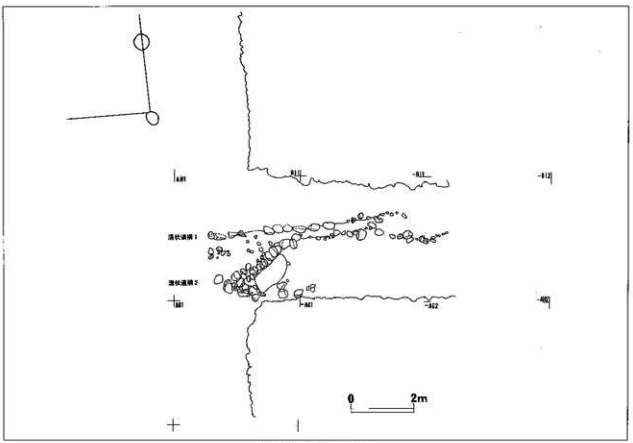
この1期の溝状遺構2の列石の中間に、石の面に接して長径1.1m、短径0.6m、深さ0.15mの規模の多量のかわらけの廃棄坑が存在した。これが掘り込まれたものとすれば、Ⅲ期の遺構となる。

(5) かわらけ廃棄坑（第11図） かわらけ（中世土師器皿）は一般に中世の城館跡と、周辺の館廻り（たてめぐり）、寺社などに出土し、中世の居住空間の復元に役立っている。この高梨氏館跡でも、遺構の発掘調査では、いずれの場所からも量の多少にかかわらず出土し、特に集中して検出される地点の存在かわらけが指摘される。さらに史跡指定地外の東方の調査（1990年）では、かわらけ・内耳土器・常滑甕破片などが検出された。この館を中核として、外郭地帯がどのような構成をとるのか、大事な問題点である。

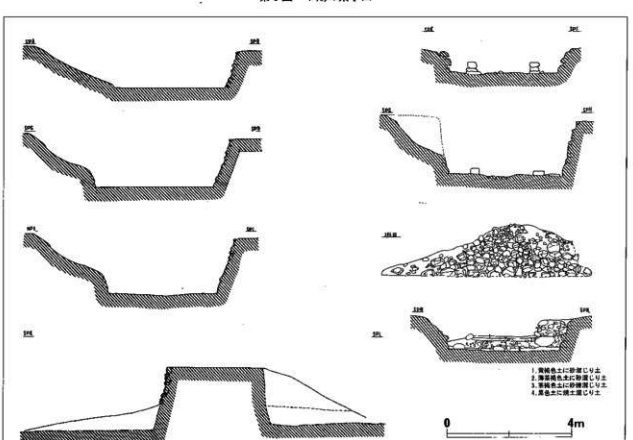
この東小口付近のかわらけ集中出土地点は、小口北側の土塁に沒入している導水路（1992年調査）の上塁際である。小口内側の第7号建物址南（1988年調査）などは、すでに過去に調査されている。今回の調査では、小口の中央から内部に、かわらけが散布し、小口南土塁袖石積前にも、完



第7図 Ⅱ期の東小口



第８図　Ⅰ期の東小口

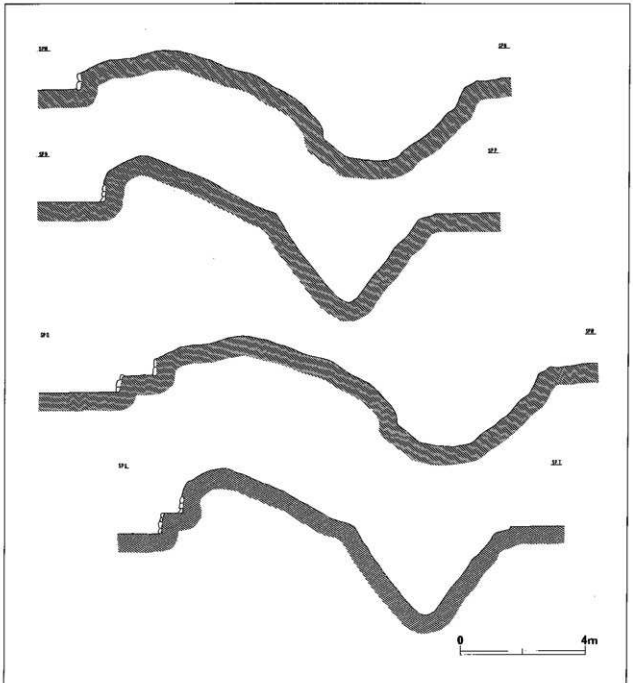


第９図　東小口断面図

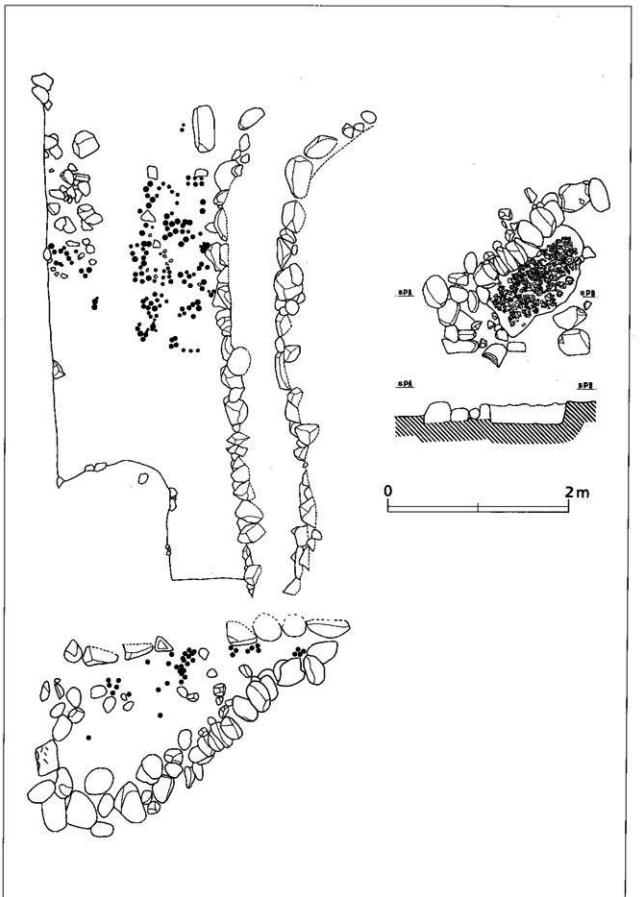
成品を含む１ｍ×２ｍの集中地点があった。

多量かわらけ廃棄坑には、推定117個の中世土師皿が一括して埋められていた。これは第Ⅱ期とした遺構面平均384.70ｍから、かわらけ廃棄上面384.65ｍを差し引いた、約５㎝の覆土が観察された。かわらけは３回に分けて取り上げた。かわらけには大小があり、油煙のついたものも少量あり、３枚重ねのものもあった。炭が10数片かわらけに混在し、鉄片（釘？）も４片検出された。

このように多量のかわらけ廃棄坑は、館内で祭祀・饗宴などか行われた後、廃棄された所とみられる。編年の位置づけ、参加人数の分析、なぜ東小口に埋められたのか、また位置・方向の問題などが問われる。



第10図　東小口付近の土塁・堀断面図



第11図　中世土師皿検出図

第2節　遺　物

1　東面土塁石積検出の陶磁器と土器（第12・13図）

東面土塁の内側石積の発掘調査で、土塁に盛られた石礫の中から各種の遺物が出土した。これは館内の耕地化に伴い、集められたものと推定される。

遺物のうち、ここでは近世以降のものを除いて提示した。越前焼の甕の破片10片が発見されている（第12図1～10）。越前窯製品は中世後期15世紀代に珠洲窯製品などを圧倒する形で、東日本海地方に普及したといわれる。

大甕の平坦な口縁端部をもつもの（第12図2）は、古岡編年甕A1タイプに分類され（古岡康暢『中世須恵器の研究』1995）、16世紀の所産とされている。高さ90cmを超すとみられる大甕の搬入は、海運から陸路と、その流通経路が問われる。その他は甕の胴部などの破片である。

鉄釉釉の耳付のお歯黒壷と推定される破片（同図24）も、16世紀の越前窯の製品とみられる。

珠洲焼系の陶器は10片発見されている。擂鉢（同図16）は口縁端部に櫛描波状文のみられるもので、古岡編年ではV期・VI期にみられる形態である。珠洲市宝立町西方寺3号窯の出土品にみられ、15世紀代に編年されている（文献同前）。鉢（同図15）は口縁下の破片で、擂鉢破片（同図21）口縁形態も15世紀代を示している。

珠洲焼甕の破片（同図11～14・20）は小片で、15世紀前半から後半の製品である。壺破片（同図19）も、15世紀前半代の特色を備えている。

青磁の碗または鉢の底部の破片（第13図25）は、破断部が高台にそって打ち欠かれている。畳付まで釉がかかり、底部が厚い。瓶の口縁部破片（同図33）は玉縁で、水裂状の貫入がある。青磁蓮弁文［鎬（しのぎ）茶碗］の碗破片（同図26）は、上田英夫の「14～16世紀の青磁碗の分類について」（『貿易陶磁研究』№3　1982）によると、A－1類に属し、細長い蓮弁文をもっているが、釉が厚いため鎬（しのぎ）は明確でない。そして、13世紀末から14世紀初頭の段階で、青磁の主体とされている。このほか2次火熱をうけた瓶の高台破片が出土している。

褐釉磁器（第12図22・23）は、2次火熱をうけた2片が発見されている。第7号建物址の土坑などからも検出されている。

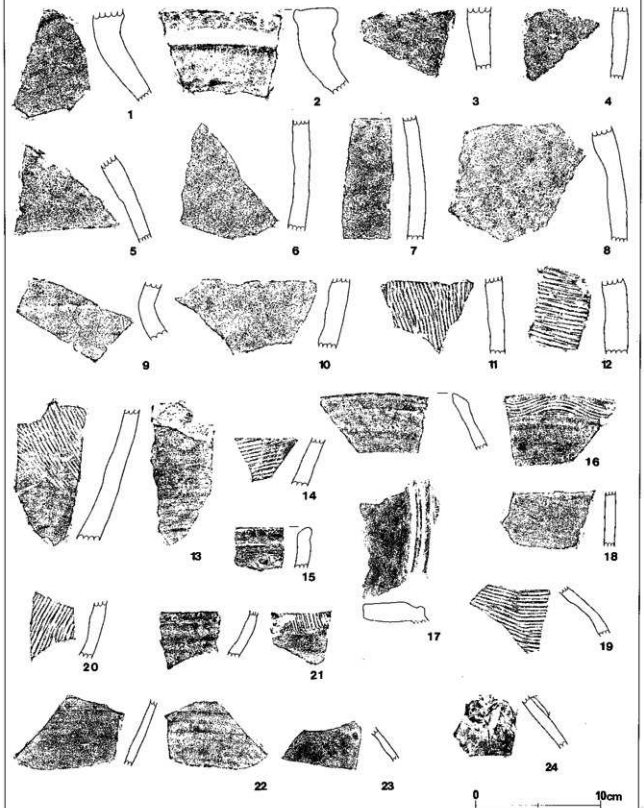
瓦質土器（同図17）は、口縁部が平坦で5cmと広く、稜は突帯状で下は雷文帯が押印されている。表面は黒色で、胎土は白灰色で堅い焼成である。

銭貨（第14図）は熙寧元宝・唐元通宝・寛永通宝・銭種不明の4枚が発見されている。このうち熙寧元宝は模鋳銭と推定され、銭種不明銭も粗雑な作りである。

2　東小口内出土遺物

青磁　厚さ1.8cmの青磁の盤の破片（第13図34）は、器形は不明だが座敷飾りに使用されたものと思われる。焼け土層からの出土である。青磁香炉の破片（同図35）は、2次火熱を受けた胴部破片で、口寄は平坦と推定され、胴部の上下に稜がある。下の稜近くに半円形の脚がつくと推察される。瓶底部破片（同図27）は稜線が段状をなし、上に圏線状の2線がみられる。釉は内面と畳付（盆付）までみられ、底は露胎で、左回りの渦糸きり（唐物糸切り）の痕跡がみられる。香炉の口寄部分と推定される小破片（同図28）は、胎土が赤褐色を呈している。釉色はややくすんだ青翠色で、細かい貫入がある。以上は黒土層（床面）の出土である。その他に鉢と碗の小破片の焼け土層出土品がある。

白磁・染付　白磁の皿と推定される破片は、7片検出されている。このうち染付は2片である。染付（同図32）は2次火熱をうけ、高台部が内傾し、畳付には砂がみられ、黄橙色を呈している。見込みの底は、周囲に圏線が2条みられ、中に渦巻き文が連続している。これは中国明の民窯の製品で、この破片は口縁部が失われているが、館内の焼け土層出土の同種の染付皿の口縁形態は、端反りである。これらは福井県一乗谷遺跡にみられ、



第12図　陶磁器・土器拓影図

表1　東面土塁石積調査出土遺物表

番号	掲載図版	系統	器種	部位	色調	調整	備考
1	第12図1	越前焼	甕	口縁部	暗青色	ロクロナデ	
2	2	〃	〃	〃	〃	〃	吉岡編年Aタイプ
3	3	〃	〃	頸部	暗青色内赤褐色	〃	
4	4	〃	〃	胴部	暗橙色	〃	
5	5	〃	〃	〃	暗灰色	〃	
6	6	〃	〃	胴部上	〃	〃	
7	7	〃	〃	胴部	〃	〃	
8	8	〃	〃	胴部上	〃	〃	
9	9	〃	〃	頸部	〃	〃	
10	10	〃	〃	胴部	〃	〃	
11	11	珠洲焼	甕	胴部	青灰色	〃	
12	12	〃	〃	胴部上	〃	〃	
13	13	〃	〃	胴部下	〃	〃	15世紀代
14	14	〃	〃	〃	〃	〃	〃
15	15	〃	鉢	口縁部	〃	〃	15世紀代前半
16	16	〃	擂鉢	〃	〃	〃	口縁部に櫛描文
17	17	瓦質土器	火鉢	〃	黒色	〃	口縁下に雷文帯
18	18	珠洲系土器	不明	—	青灰色	〃	
19	19	珠洲焼	壺	胴部上	〃	〃	
20	20	〃	甕	胴部下	〃	〃	
21	21	〃	擂鉢	胴部	〃	〃	
22	22	鉄釉磁器	壺	胴部下	暗セピア色	〃	
23	23	〃	〃	〃	〃	〃	
24	24	越前焼	小形壺	胴部上	〃	〃	お歯黒壺
25	第13図25	青磁	碗	高台部	暗翠色		胎土白
26	26	〃	瓶	口縁	明翠色		胎土灰白色
27	27	〃	碗	〃	〃		蓮弁文しのぎ蓮碗
28	—	〃	瓶	高台部	〃		2次火熱
29	第14図2	中国銭	無寧元宝				模鋳銭
30	1	〃	開元通宝				
31	3		寛永通宝				
32	4	銭種不明					

小野正敏氏は白磁皿C群として、15世紀後半から16世紀第3四半期ごろの遺跡からの出土が多いと指摘している（小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類について」同書）。また、本館跡出土の外来系と推定される白色の強いかわらけが、同じ口縁形態をとり、さきの白磁皿のうつしものである可能性が高い。

直角を呈する染付の破片は小破片で、器種の特定は困難である。強いて言えば皿底部と推定される。末掲載白磁の破片には見込みや、釉が底部にみられず、腰のあたりからみられ、厚さ3㎜と薄手の製品である。鉱滓で融着した2片の白磁と、端反り皿の胴部の破片、ゆるく外反した碗の破片（未掲載）などは、焼け土層からの検出である。

鉄釉磁器の天目茶碗の底部付近の破片（13図29・30）は、1片が2次火熱をうけている。いずれも外底部は露胎である。鉄釉壺（第12図22・23）の破片は、先に述べた東土塁石積からの出土品、および第7号建物址土坑出土品にみられるものである。

瓦質土器（未掲載）は火鉢の胴部の破片で、内外黒色で胎土は明褐色を呈している。

3　土師質土器皿について

これまでの発掘調査で出土した高梨氏館跡出土の土師土器については、成形技法、形態、大きさを基準として分類した。A、B、C、D、E、F、G、Hは成形技法および形態を基準とした分類、1、2、3は相対的な大きさを基準とした分類である。1は大形、2は中形、3は小形のものである。

また、成形技法は大きく二者に分類される。（1）手づくね成形されたA類とB類。（2）回転台成形されたC類～H類である。

A類

大形のA1類、中形のA2類がある。胎土は粉質で、白色に近い。手づくね成形である。やや内湾する体部をもつ。体部には二段の強いヨコナデが認められる。そのため、体部はやや屈曲した感を与える。底部はヘラケズリ、体部下端にまでヘラケズリがおよぶ。

B類

大形のB1類、中形のB2類がある。胎土は粉質で白色に近い。底部がヘラケズリされていることから手づくね成形であると考えられるが、断定できない。体部の立ち上がりは低い。二段の強いヨコナデが認められ、屈曲している。

C類

回転台で成形され、底部に糸切り離し痕を残す。大形のC1類、中形のC2類、小形のC3類に細分されるが、いずれも強いヨコナデ痕を残す。C1類の胎土は赤褐色で細粒子を含む。C2類の胎土はやや粉質、C3類は粉質である。

D類

本遺跡で最も出土数が多く、主体となるものである。大形のD1類はないが、中形のD2類、小形のD3類がある。胎土はいずれも赤褐色の細粒子を含む。回転台で成形され、底部に糸切り離し痕を残す。体部がやや内湾する形態のもので、最も出土数が多い類である。D3類は体部の立ち上がり部分、および口縁部に強いヨコナデが二段認められ、形態的特徴を形成している。しかしながら、形態的なバリエーションがあり、E3類と明確に分離できないものが若干認められる。

E類

大形のE1類はなく、中形のE2類、小形のE3類がある。胎土は赤褐色を呈し、細粒子を含む。回転台成形され、底部に糸切り離し痕跡を残す。底部から外反するように体部が立ち上がる類である。D類に認められるような強い二段のヨコナデは認められず、体部は直線的な輪郭をもつ。

F類

大形のF1類、中形のF2類がある。回転台成形され、底部に糸切り離し痕を残す。口縁部が外反する形態的特徴をもつ。

G類

回転台成形され、底部に糸切り離し痕を残す。底部から急角度で直線的に立ち上がり、強いヨコナデ痕を内外面とも残す。胎土は赤褐色で細粒子を含む。やや赤味の強い色調をもつものが多い。

H類

回転台成形され、底部に糸切り離し痕が残る。

体部の立ち上がりが底径に比べて小さい形態的特徴がある。強いヨコナデが立ち上がり部に一段認められる。

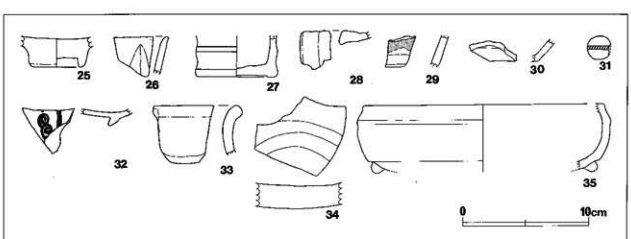
今回の調査で検出されたものは、いずれもD類に相当するものである。これら大量に発見された上師質土器は、出土状況から一括性の高いものと考えられ、すでに分類を試みた各類のうち、D類は時期の指標を示す一群と考えられよう。

先回の報告では、D類は15世紀代の前半に属する一群と考えた。しかしながら、文献史学の成果によれば、高梨氏が本居館を維持していた中心は16世紀の初頭以後であるとされており、東側小口も16世紀代に利用されていたと考えるのが自然である。

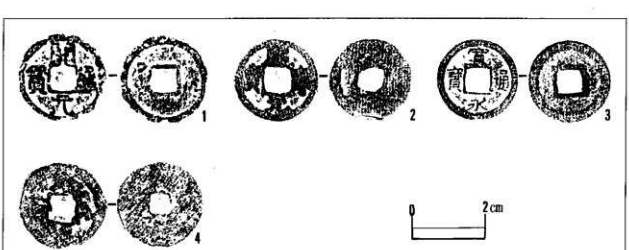
とすれば、東側小口で検出されている中世土師皿の年代も、16世紀代の所産とすべきであろう。D類の製作年代の推定については、長野市栗田城跡出土資料との類似性を根拠とした。先回の報告でもふれたように、高梨館のD類と栗田城跡の例を比較すると高梨D類はやや器高が高く、編年的に後出的様相をもっていると考えていた。

こうした点を加味すれば、高梨館D類の編年的位置づけをこれまで考えていたよりも新しい段階、15世紀の後半から16世紀の前半に訂正しておきたい。すなわち、先回の報告のⅢ1期（D類）を15世紀の後半から16世紀の前葉、Ⅲ2期（E類）を16世紀の中葉に位置づけておきたい。

中世土師皿の編年については、まだまだ多くの課題が残されており、先述したような編年もひとつの試案と考えていただきたい。



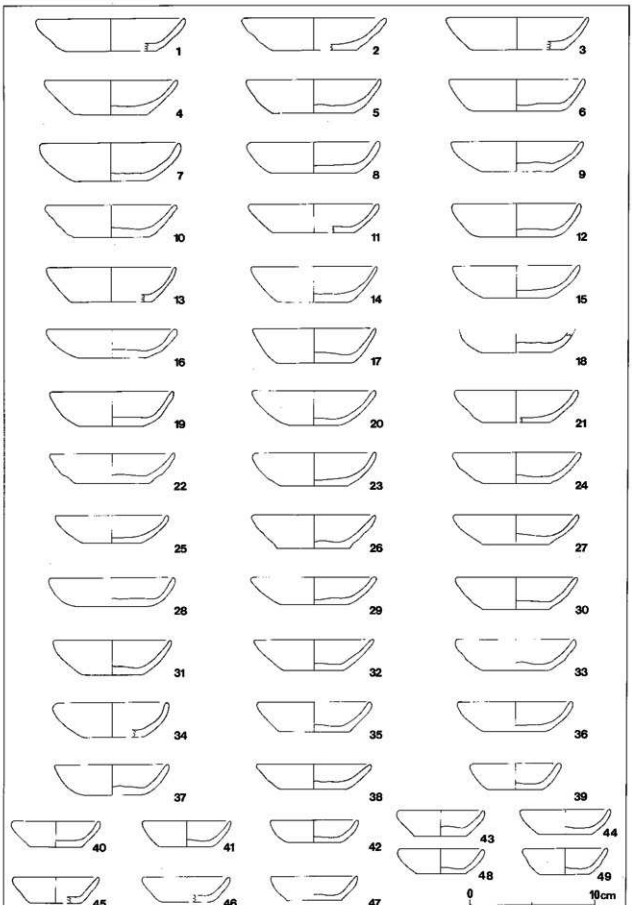
第13図　陶磁器実測図



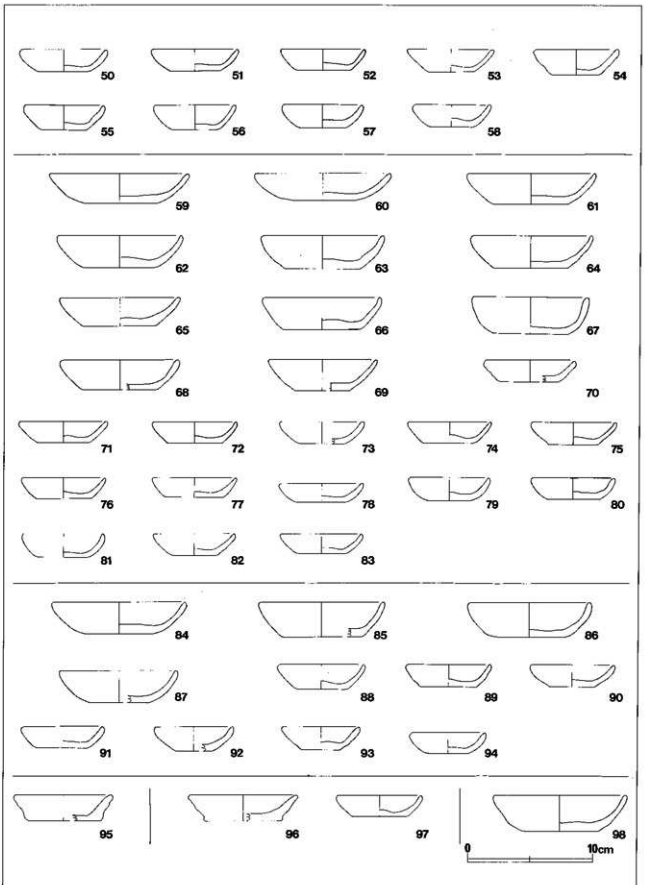
第14図　古銭拓影図

表2　東小口出土遺物表

番　号	掲載図版	系　統	器　種	部　位	色　調	調　整	出土層位	備　考
1	第13図32	染付	碗	底部	青・白色		焼土層下	圏線・渦巻文、2次火熱
2	—	白磁	〃	口縁	白色		〃	
3	—	〃	〃	底部	〃		〃	
4	—	〃	〃	胴部	〃		〃	
5	—	〃	皿	底部	〃		〃	4・5付着
6	—	染付	不明	不明	青・白色		〃	
7	第13図34	青磁	盤？	底部	明青緑色		焼土層中	2次火熱
8	35	〃	香炉	胴部	〃		Ⅱ時期	黒土層
9	27	〃	瓶	底部	〃		〃	(床面)
10	33	〃	〃	口縁部	〃		〃	
11	—	〃	碗？	胴部下	〃		焼土層	2次火熱
12	—	〃	碗	口縁	〃		〃	
13	29	鉄釉	天目茶碗	胴部下	暗鉄さび色		〃	
14	30	〃	〃	〃	〃		〃	
15	—	〃	壺	胴部上	暗セピア色		〃	表1　22・23と同種
16	—	瓦質土器	火鉢？	胴部	黒色		〃	
17	—	古銭	銭種不明	半欠	暗緑色		〃	2次火熱
18	第13図31	土器	灯芯押さえ	—	赤褐色		〃	



第15図　中世土師皿実測図（1）



第16図　中世土師皿実測図（２）

第３節　各小口の比較検討

現在までの調査で、土塁を切断して造られた小口は、高梨氏館跡では４カ所発見されている。しかし庭園西の小口は、土塁が切断されていたが、堀の調査で木橋などの遺構は発見されず、出入り口とは確認できなかった。そこで、残る３カ所について比較検討したい。

高梨氏館跡は現在までの研究成果から、方形館を中心として、館の周囲には建物址・道路址・溝址などの遺構が予想される。発掘調査した小口（虎口）は、直線的に入る平入り小口と推定される。平入り小口は、織豊系城郭の虎口を研究された千田嘉博氏（1987）によれば、Ⅰ期1550年ころまでの形式とされている。

１　東面の小口

東小口の第Ⅳ期（第１面）は、①小口幅が狭く、②小口内部に土盛があり、③中央に溝状の遺構が伴う。

第Ⅲ期（第２面）は、①小口の幅が石積によって、南側が狭められる、②小口の石積が土塁中央で、「八の字」状に内部に開き、土塁内部袖石積の上段の石積に連続する、③土橋中央に石積が構築される。

第Ⅱ期（第３面）は、①単純に平行する、広い小口の両側壁の石積、②前者の石積が、土塁内部で直角に曲がり、下段の土塁袖石積に連続して積まれる、③小口南の側壁石積が、土橋南の石積と直線的に連なって構築されている、④門の礎石は４基みられる。

第Ⅰ期（第４面）は、第３面の下部遺構で、①溝状の遺構、②かわらけ廃棄坑遺構がみられる。ただし、かわらけ廃棄坑は、第３面からの掘り込みと推察される。

これら小口の遺構の時期について、先学の業績による文献史学と合わせて、筆者の推測を交えて見解を述べる。

第Ⅰ期は、高梨氏入館以前の遺構で、南側通行口で検出された土塁中心に保存された、築地塀と地下に埋没した小庭園？と同時期とみられる、近世資料の『中野古来覚書』（白井文書）は、永正12年（1515）館普請成就と伝えており、これを信じれば、その以前の遺構となろう。

第Ⅱ期は、『中野古来覚書』によると、高梨氏が先住者を追って、ここに館を構えた時期であり、16世紀初期となる。これを遺構面からみると、礎石の大きさが４基とも同じことから、防備を目的とした櫓門と推定したい。礎石Ａ・Ｂ間（間口）は1.97ｍ（京間１間）で、奥行きは2.29ｍ（同1.1間）である。小口両側壁石積間は、北側壁石積が移動した痕跡があるため、定位置とみられる内部で測定すると、3.9ｍ（同２間）となる。

ちなみに、京間尺の使用は、一乗谷朝倉遺跡やその他の研究によれば、16世紀はじめ頃から使用されている。高梨館の遺構の復元に援用できる可能性がある。

第Ⅲ期は、土橋中央を石積で遮断し、小口の幅を2.5ｍと狭め、盛土している。この狭められた小口の門の構造はつかめていない。しかし越前朝倉家に相伝された『築城記』（『群書類従』巻四一九）に16世紀前半から中頃の戦国城郭の築城方法が記されており、木戸（城戸）は柱間（間口寸法）７尺（2.1ｍ）とし、「冠木木戸」の左右の柱は、太いほどよいと記されている。

小口側壁石積から続く土塁内部の石積は「八の字」状に開いて、一種の防御状を呈している。先述のように堀もさらに深く普請し、このような様々の構築から、総じて防御力の強化を図ったことが窺われる。

高梨氏がこの館に入部以後、歴史上でみる最大の軍事的緊張を察知すると、甲斐武田氏の北信濃進攻作戦の時期であろう。天文22年（1553）には、村上義清の本城、埴科郡葛尾（かつらお）城が武田氏の包囲網によって自落し、村上氏は高梨氏をたよって越後に亡命した。同年第１回の川中島の戦いが行われ、長尾氏と武田氏の兵が更級郡八幡原で戦っている。

弘治元年（1555）、中野の後背地を領する山ノ

内地方の小島・夜交氏なども武田氏の謀略のため、その軍門にくだっている。この前後、当主の高梨政頼は館・山城（詰）をすてて、越後の前衛基地飯山城（飯山市）に退去したとみられている。

このような経過をみると、軍事的緊張の画期は1550年ごろと推測される。この推論が正しければ、このⅢ期は16世紀半ばの構築かと思われる。

また、東小口と西面南小口は、東西直線上にあり、位置的にも同時期の構築を示唆している。

第Ⅳ期は人工の溝状遺構が認められるが、自然埋没土上の遺構で、近世以降のものと想定される。

2　西面南の小口

この西面南小口は、堀側の発掘調査が一部残されている。これまでの調査結果によれば、南よりに蓋石を伴った列石による溝があり、中央付近の小口側壁石積間（幅）は4.3ｍである。これは京間１尺＝32.5㎝で計算すると、13尺＝4.22ｍとなり、4.3ｍを１尺＝30㎝で割ると、14.3尺と計算される。

高梨政頼（？－1576）の時代と思われる「高梨文書」に館普請の記録があり、大門改修に必要な用材を領内の家臣・郷村に割り当て、城館の防御の体裁を整えている。それに関する史料は、つぎとおりである。

大門次第之事
門之広サ　丈二尺
一　柱一本　後（役カ、以下同じ）小嶋殿之屋
一　柱一本　後上条之屋
一　冠木　後夜交殿之屋
一　まくさ　後金倉之屋
一　車寄　同
一　扉材木　後小菅之屋
（「高梨文書」）

これをみると門の形式は冠木門であり、小嶋氏（山ノ内町）・夜交氏（同）・上条（郷）（同）などから大きな用材を集め、遠くの小菅（飯山市）からは扉材が寄進されている。

この小口も遺構面に黒色土（炭）が広がり、ケヤキなどの炭化材がみられた。しかし遺構面からは、柱跡などは検出できなかった。この上層は小石と砂礫で小口が埋められ、石積石が抜かれた部分がある。この小口に残っていた側壁石積と、それにつづく内部の袖石積は、他の石積に比べて、使用されている石が大きく立派であった。

小口は前述のような京間尺・曲尺のいずれの基準尺をとっても１丈３尺に収まる。よって、この小口はすでに湯本軍一氏が推定していたように、山城を背にした館の正門（西礼の館）とみられる（「倍濃高梨氏の景観復原」）。この小口の存続期間は、東小口のⅡ期と同時期に機能し、あるいはⅢ期にも使用されたとも推測される。

3　西面北の小口

西面北の小口の発掘調査前は、幅１ｍ程の狭い通路があって、堀は土橋になっていた。この通路の北側には後世の石積があって、これを取り除いて調査した。この石積の裏側には、館内の耕地化に伴って搬出されたと思われる石礫が裏込めとなっていた。ここは現代面と遺構面だけで、遺構面には大壁の破片、木材の炭化物、鉄の鎹などが検出されている。両側壁石積は上部が崩落した状態を示し、北側には組合せ五輪塔の空風輪各１個が落石にまじっていた。小口の南側壁石積は、直線で長さ約８ｍ、高さ１ｍを測り、内部は直角に石積に連続している。

北側の石積は内部がやや開いて積まれ、南側直角部との距離（幅）は3.5ｍで、中央部の幅は、３ｍである。土塁外面から1.5ｍ入った位置に門の主柱の礎石がある。面径は50×80㎝と大きく、内部の２礎石は、35×45㎝と小さく、控え柱の礎石と推定される。薬医門・棟門・高麗門などいずれかの形式が想定される。

扉の付く外の主柱礎石間は、京間尺8.5尺（2.76）ｍ、曲尺９尺（2.72ｍ）となり、主柱と控え柱礎石間は、1.95ｍ＝京間１間、曲尺6.5尺＝1.95ｍの計測値を得る。

このような調査結果から、西面北の小口は、正門の南小口の脇門として機能した時期と、のちに正門として使われ、館の廃絶時までそれが存続し

たとみられる。この小口には、このような2段階の時期があったと想定される。

あるいは東小口のⅡ期の段階にに高梨氏が入館して以来機能していたのかもしれないが、Ⅲ期も後半に至り、この面の南門が閉鎖されてから、この小口が主門として機能したともみられる。西面北の小口の門の構築もⅢ期以降、16世紀末までの期間と考えられる。

ともかく焼土遺構が保存され、埋没していたことから、廃絶後かなりの年月を経て後世の石積が施されたとみられる。

近世にふくめたⅣ期の17世紀には、中野村が江戸幕府直轄領になり、現在の町並みの原形が造られたとみられる。そして館の西南方に中野陣屋が設けられ、北信濃の幕府領を統括した。その後、館内に稲荷社が祭られたりして、館南側の土塁を削して堀を埋め、現在の通行口が造られたと推定される。

第Ⅲ章　ま　と　め

今回の調査は、館内主要部の復元整備事業の工事進行中に並行して発掘調査を行った。このため、遺跡の保護の面と拮抗する場面もあった。

近年全国の城館跡の調査がすすみ、その成果は見るべきものがある。この中には、高梨氏に関係の深い、越後上杉氏に関連する、越後府中（上越市）周辺の発掘調査もあり、1993年度には日本考古学会のシンポジウムも開かれ「守護所から戦国城下へ」(1994) が刊行されている。

これによると、越後府中（国分・府内・直江）上杉氏の守護所館跡の可能性のあるとみられる遺跡から、15世紀～16世紀前半の陶磁器・漆器などの高級品や、16世紀初頭の京都系土師皿が出土している。このように、ここからは高梨氏館跡と同時代の類品が検出されている。上杉氏の守護代長尾氏と姻戚関係にあったとみられる高梨氏との比較研究が求められる。

高梨氏館跡の考古学的調査には、まだ多くの課題が残されている。しかし東小口の再調査では、少なくとも3段階の変遷が認められた。この画期は歴史上で知られている高梨氏の動向と、どのように整合するか、本文で一応の見通しを述べてたが、さらなる検証が必要である。

このように、戦国時代初期の奥信濃に、覇をとなえた高梨氏の館跡には、多くの遺構が残されており、周辺の「館詰り」を含めて、今後の検証の積み重ねが必要と痛感される。

主な引用・参考文献

中野市教委　1990『高梨氏館跡発掘調査概報』Ⅰ
同上　1991　Ⅱ
同上　1992　Ⅲ
同上　1993　Ⅳ
佐久市教委ほか　1991『金井城跡』
岐阜県大和村教委　1984『東氏館跡発掘調査報告書』
岐阜県神岡町教委　1979『江馬氏城館跡発掘調査概報』
田中哲雄　1990「高梨氏館跡の庭園遺跡」『仏教芸術』192号
吉岡康暢　1995『中世須恵器の研究』
上田英夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№3
小野正敏　1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類ついて」文献同上
小野正敏　1981「越前一乗谷の町割りと若干の問題」『日本海地域史研究』第三輯
半凡社　1994『日本史大事典』
湯元軍一　1991「信濃高梨氏城下の景観復原」『中世の村落と現代』
「遊行二十四祖御修業記」1979　定本『時宗宗典』下巻
金子拓男・前川要編　1994『守護所から戦国城下へ』日考協新潟大会シンポジウム集
小島道裕・千田嘉博　1994「城と都市」岩波講座『日本通史』10　中世4
西ヶ谷恭弘　1993『戦国の城』総説編
石井進・萩原三雄編　1991『中世の城と考古学』

1　西から見た東小口

2　東面土塁の石積
（右は東小口）

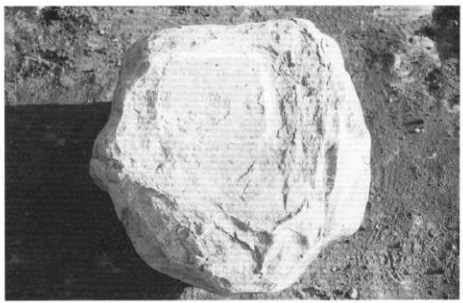
3　同　中央から北方を見る

4　同　北の部分

5　内部から見た東小口（中央から奥第Ⅳ期の遺構）

6　小口南側のⅢ期の石積（手前と上）

7　東小口の第Ⅱ期（手前）
と第Ⅳ期の遺構
（箱尺右礎石腹の石）



8　礎石痕の石
（裏返しになっていた）

9　外側から見た
第Ⅲ期の東小口

10　東小口第Ⅱ期の
礎石現れる

11　北から見た東小口の
第II期の遺構面

12　北からみた第II期の
側壁石積と第I期遺構
面の掘り下げ

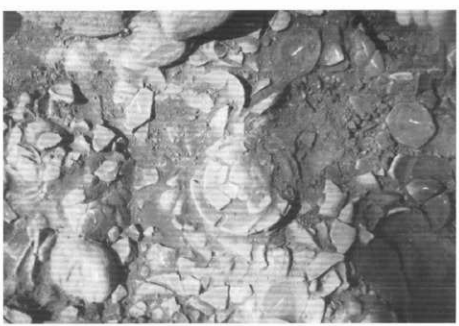
13　南から見た東小口
第I遺構面と北側壁石積

14　西から見た東小口
南袖石積前の中世土師皿

15　同　第2面

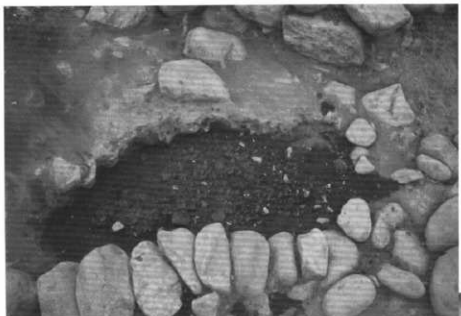
16　同　南袖石積全景

17　西からみた中世土師皿〈かわらけ〉廃棄坑

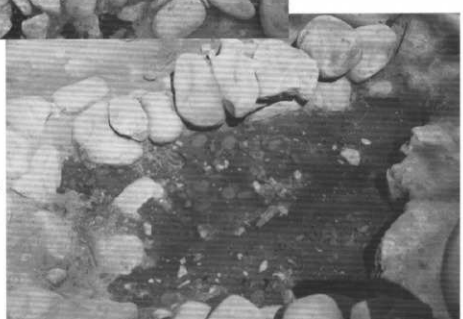


18　かわらけ廃棄坑の上部

19　南上から見たかわらけ廃棄坑



20　かわらけ廃棄坑の中層



21　同　下層

22　かわらけ廃棄坑の
掘り方

23　西から見た東小口第Ⅰ期遺構面

24　同　調査完了時

25　同　東から見る

高梨氏館跡　発掘調査報告書

印　　刷　平成７年３月20日
発 行 日　平成７年３月31日
編集・発行　中野市教育委員会
　　中野市三好町１－３－19
印 刷 所　カシヨ株式会社